

## 「今の路考」——奥村利信作画期考——

木 村 八 重 子

ここに紹介しようとする草双紙『ふくじん』は、「日本小説年表」には該当がなく、「日本古典籍総合目録データベース」に、「著作 I D 1660679 / 統一書名 ふくじん (ふくじん), K, 1 / 巻冊 一卷 / 分類 黒本 / 著者 奥村 / 利信 画 / 国書所在 【版】国会 / 著作 種別 和古書」とある。「国会」の他には所在が知られず原題は未詳、現題『ふくじん』は柱題により後補された書題簽による。

この作品は後述するようにかなり重要な問題を含み、絵も堂々とした佳品である。既に電子公開されているので、誰でも何時でも自由に見ることができるが、改めて全部を影印紹介し考察することとする。

### 1. 書誌

所蔵 国立国会図書館 (請求記号Ⅱ本別 1318) 「ふくじん」の題名でデジタル公開。

表紙 改装 (樺色) 一冊

題簽 欠 (後補書題簽「ふくじん (右端) 奥村利信画」)

商標 なし

柱題 ふくしん

丁付 壹、二、五 (五は丁付箇所破損)

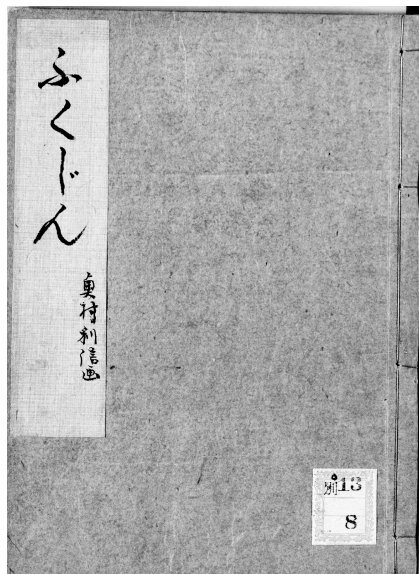
画作者名 奥村文全利信画 (五オ)

特記 一オに「新板福神双六」、下端に「通塩町 (瓢箪形) 奥村版」あり。

印記 館印二顆 (一オ)、「松雲堂」 (後補後ろ見返)

墨記 なし

右の書誌は筆者の方式による。補足と説明を加えれば、書形は草双紙通有の中本、「商標」とは五丁単位の各冊初丁樺上に備わる版元の商標である。本作品は奥村版だが一オの下端にあって異例である。目出度い内容で五丁ものであることから、原装は丹表紙の「赤本」であった可能性が高い。なお、同じ樺色表紙を付した改装は天理大学附属天理図書館にも存し、古書肆松雲堂によるものと推定される。



## 2. 翻字と小解

### 改装表紙

(書題簽)「ふくじん／奥村利信画」

一才

(右) 福神 遊 草紙 ふくじんあそびのそふしは／(左) 初 はつ春の御たのしみのたねならんか 楽種

\* 右の文を左右に割って表示する「新板福神双六」。上方に七駒を儲けて七福神を配し、弁才天を「上り」とする。「振り出し」は題名のある中央部分であろう。ここに、

「一 小つち」槌 「二 てうし」丁子 「三 ざ」座頭 「四 かくれかき」隠笠

「五 八かうの玉」光 「六 しん者」信 と六つの宝の名が記されている。

一六に記されない宝が六つある。それは右上から「ゑんめい袋」延命

「かき」鍵 「ふんとう」分銅 「四方」(じっぽう) 「せに」銭 「かくれみの」隠蓑 である。「信者」

「座頭」が宝と同列なものも面白い。「三 ざ」とう」の文字には疑問が残る。



一ウ二オ

義明  
寿老人

三浦大助よしあき しゅろうしん

荒  
毘沙門

三浦あら治郎 びしやもん

寿老人様

打

(唐子)「じゅろうじんさまはうつつ付た おやくじや」

毘沙門様

三升

(唐子風少女)「びしやもんさまはさんしやうにそのまゝじや」

\* 画題は「百六つの寿の三浦大助」の転用。

\* 八十九歳の三浦大助義明に扮した寿老人は、一門の士気を高めるため、常の頭巾を大助の揉烏帽子のように被り、馬ではなく常に伴う鹿に打ち乗り、右の手に鞭を持ち左の手に手綱かい繰り出陣しようとするのを、鉾を横たえて止めようとする息子三浦荒治郎義澄に扮した毘沙門天。大助は討死の後、頼朝より百六歳と称えられた。

(黒本青本「三浦／衣笠／百六壽」を援用)

\* 大助と荒治郎のこの場面はほぼこの形で描かれる。

\* 寿老人が八十九歳の大助に扮するので「打って付けの役」

\* 三浦荒治郎に扮した毘沙門天は「三升(市川団十郎)そっくり」とある。面貌は二代目市川団十郎(元禄元年―宝暦八没)とも見えるが四代目市川団十郎(正徳元年―安永七没)か。



二ウ三オ

手越 少将

恵比寿

てごしのせうく弁才天 ゑびす朝比奈

様 巾広

取 開

板のよふなるはばびろ帯二重ながらむんづとり あけんとすれば

こはいかに らきにもたへぬすがたにて そのおもきこと大ばんじ

やくことく成 二重のうち帯ちぎるゝか 我うでばねをぬかるゝ

如 齒 腰 締 切 打 千切 腕骨 抜

か 柳のこしをしめきるか 三つにきつはじやうのもの とゑい

やくとはがみをなす

(唐子風少女たち)「いまのろかうとついじや」

今 路考 対

\* 画題は「草摺引き」の転用。

\* 羅綺にも耐えぬなよなよした姿の手越の少将に扮した弁才天と、

その巾広帯を引く朝比奈に扮した恵比寿。本来は曾我五郎の草摺を

引く朝比奈。

\* 今の路考Ⅱ二代目瀬川菊之丞(寛保元生—安永二没)。宝暦六年

十一月に菊之丞を襲名、俳名も二代目路考。対は一对、同等。





三ウ四オ

僧正坊 鼻 重

福祿寿そうじやう坊 「はながおもふてならぬ」

(唐傘天狗に扮して鉦を鳴らす唐子) 「ちゃんくくく」

(同) 「おれらは からかさてんぐで あめをはじいて よひは

く

(木の葉天狗に扮した唐子) 「ほんのこのはてんぐじやぞ」

\* 画題は「僧正坊の腕に乗る牛若丸」の変形。

\* 僧正坊に扮した福祿寿は天狗の鼻の代わりに巻物を後頭部から縛り付けているので「重い」。福祿寿は寿老人と同等、五ウでは巻物を杖に結んで持つ。

\* 牛若丸に扮した唐子は福祿寿の長い頭頂に寄りかかっている。



四ウ五オ

(見物の唐子一)「どふでも大黒様はつよひく」  
強

力目慢 布袋

(見物の唐子二)「ちからじまんのほてい様もこれにはかなわぬ」  
適

六十九ばん 番勝 かちければもはやすまふはあらざるかとおふでをひろ  
相撲 有 大手 広

待 げてまちかけたり

大黒天

川津の三郎 だいこくてん

本 川津掛

(大黒天)「これかほんのかはづかけじや」

又のゝ五郎はてい  
野 布袋

奥村文全利信画

\* 画題は「川津掛」の転用。

\* 川津三郎に扮した大黒天と又野五郎に扮した布袋の相撲で、大黒天が川津掛で勝つ。二福神の川津掛は大津絵にも描かれている。

\* 詞書きはないが、行司は着衣の模様の三柏や頭巾から恵比寿。



五ウ・改装後ろ見返

(布袋)「あたまやまへのぼったからこけい〔を〕いたしま〔す〕」  
頭山 登 唐子 芸

\* 画題は「唐子の曲芸」。形の定まった伝統性はない。

\* 福祿寿の頭頂で逆立ちする唐子。綱渡り、輪潜りの道具が見える。

唐子の姿は絡繰り風。

\* 布袋が鼓を打ち、大黒が笛を吹く。

\* 頭山は愛宕山の振りか。

\* 改装の後ろ見返に朱印「松雲堂」がある。

### 3. 考察

内容は掲載図版で明らかのように七福神ものであり、冒頭に「新板福神双六」を据え、翻刻の小解に記したように三浦大助、草摺引き、牛若丸を腕に乗せる僧正坊、川津掛、唐子芸の五場面に七福神を配した目出度く面白い作品である。中でも注目を引くのは第二番目の「弁才天の手越の少将と恵比寿の朝比奈」であろう。蓮池に亀を泳がせ小舟を浮かべて遊ぶ少女風の唐子たちに「今の路考と対じや」と言わせている。「対じや」は「一对である」「同等である」の意味で手越少将に扮した弁才天を褒めていることになる。

「今の路考」とは初代路考に対して「今の」と言っていると解され、(初代を「今の」と言う例は現時点で見当てていない)。宝暦六年十一月に瀬川菊之丞を継いだ二代目路考を指すであろう。試みに「評判記」で「瀬川菊之丞」評に当たってみると、次のような例を拾うことができる。(傍点は筆者)

1. 宝暦七年三月刊『役者笑上戸』頭取(路考が寛延二年九月二日に死去し、仙魚の九年の丹誠により去子の顔見せに忘箇の浜村吉次を二代目の菊之丞にしたが、後の霜月(筆者注||閏十一月)にほろ酔いで物干へ出て頓死)……今菊之丞が嘆き(下略)

2. 宝暦八年正月刊『役者初火鉢』地廻りひいき組大ぜい 菊之丞なりして中村座の初ぶたい大当り……今路考殿打ませふ、よい……(下略)

3. 宝暦八年三月刊『役者将棋経』わけ知り日 ……今、菊之丞が立姿、親に其尽(下略)

4. 宝暦九年三月刊『役者開帳場』頭取日 ……そりやこそけふからこちの今路考が出勤じやはと(下略) いが町組 ……若女形は瀬川今菊(下略)

5. 宝暦十年正月刊『役者段梯子』芝居好日 ……古人瀬川路考は十三年以前に身まかれしが、御ひいきのつよみにて、此子めき……と評判日に増し、まんまと二代目の路考に成すまし、去春狂言少将の役に自害の仕内大でけ……(下略) いが町組 ……いよおらが路考、今での色とり(下略)

6. 宝暦十一年三月刊『役者一向一心』上野より ……誰かと思へば、路考とは(下略) 頭取日 ……ことに御らんのごとく路考の出端といふと(下略)

以下にも、明和二年十一月刊『役者當時倍』や同五年正月刊『役者紫選』、同五年三月刊『役者言葉花』に「今路考」や「今の路考」が出て来るが、それは「先ん路考のゆづりにて」とか「先んの路考は六十に及んで」とか「仙魚を中興開基として」のように先代と対比する記述や、仙魚に続く記述である。つまり、襲名から四、五年後には、少なくとも評判記では「今の路考」ではなく「路考」であったと解される。

従って『ふくじん』の成立は、早くて宝暦七年から不確定ながら同十年くらいまで可能性として押さえておく必要があるであろう。このような目で見えてくると、二代目瀬川菊之丞は宝暦九年正月中

村座「初買和田ノ宴」で賈朝比奈に扮した市川八百蔵と半太夫節「鶯宿梅妻戸ノ帯引」で「帯引き」を演じていることに気づく。評は、右に列挙した評判記の4.に「拳障子の内よりしとやかに出て、朝ひなと帯曳の所作事の仕内大あたりく」とある。「鶯宿梅妻戸ノ帯引」の詞章が見つかり、『ふくじん』二ウ三オの言葉書きと通ずる点でもあれば確実であろうが未だ突き止め得ず、この上演の影響下に作られた可能性を推定するに止めざるを得ない。ただし、『ふくじん』の成立が初代の子吉次が二代目瀬川菊之丞を襲名した宝暦六年十一月以前でないことだけは明確であろう。

一方、一ウ二オに言う「三升」には疑問が残る。奥村利信描くこの三升の面貌は二代目の方に近く、二代目市川団十郎が三升を号したのは享保末年までらしいが、後々まで「三升」を号したか、人々の呼び習わしであろうか。彼は宝暦七年二月市村座「染手綱初午曾我」の景清を最後の舞台として翌八年九月に没するから、二代目瀬川菊之丞（路考）とはわずかながら併存し得てはいる。宝暦四年十一月中村座「三浦大助武門寿」の岡崎悪四郎から明和七年十月まで市川団十郎を名乗り、三升と号した四代目なら「今の路考」と矛盾がないか、この面貌を四代目とみて良いであろうか。

「三升」に疑問は残るが、筆者の仮説は「今の路考」ただ一つで宝暦六年十一月以降と見るものである。これが許容されるなら、問題は奥村利信の作画期である。

『浮世絵類考』には立項はされているが「○奥村利信（一枚画あり）」と誠に素っ気ない。<sup>(注3)</sup>

最も筆を多く費やしている文献は、井上和雄編『浮世絵師伝』

（渡辺版画店、昭和六年刊）とみられる。これには「利信」と立項し、【画系】政信門人、【作画期】享保―寛延」とあって、記述は「奥村氏、鶴月堂、文全と号す、美人画及び役者絵を巧みにし、享保八九年頃より寛保年間に亘りて、数多の漆絵（紅絵）を発表せり。彼に就ては従来三種の説あり」以下三十三行にも及ぶので、要を摘むと、

一、政信の子、宝永六年生、寛保三年没、三十五歳、（米人フィッケ氏が某書に拠るか）

二、政信の弟か、天折（落合直成氏説）

三、政信門人であろう、元文或は寛保の初頃没か（藤懸静也氏説）を挙げ、三が妥当だが、寛延年間に彼の青本があるので、没年は延長する必要があるとする。次いで、享保十三年以降専ら奥村屋から出版し、落款の肩書に政信に倣って「東武大和画工」「大和絵師」「大和画工」「日本画工」とし、画印には「奥邨」としたこと、細判漆絵（紅絵）で最後に近い寛保年間の作に「なつもやう／むねあけ／三幅対」「床之内三幅対」おどり子ふうなどがあること、草双紙では、延享年間の黒本『高砂十帰松』三冊、寛延二年版の青本『編木／三八／痾瘡除』二冊、寛延年間の青本『作奴化物退治』三冊等を以て彼の作は終わるので程なく他界か、とし、この作画年代から彼は政信の最初の入門者で、享保十年頃の豎大判漆絵「八百屋お七対面の図」は代表的傑作、とする。

右の文中に草双紙は三点あり、刊行の時期を記して、それを以て没年を推定している。しかし、いずれにも確たる証拠は示されていない。



この『浮世絵師伝』が世に出た昭和六年時点には、「日本小説年表」は既に刊行されている。大正十五年刊の『新修日本小説年表』に右の三点があり、昭和四年刊の『日本小説書目年表』には、「年玉日待噺 三」が「文角門人／奥村文志利信」とされて四点となる。しかし、『疱瘡除』が「寛延二年」となっているのは「未詳」である。井上和雄氏が他の二点の刊年をどのように推定したのかは不明である。

以後のものでは、昭和九年刊の『草双紙と読本の研究』（水谷不倒著、奥川書房）にも四点あるが、さすがに「年玉日待噺」は除外し、「狼に衣 二」が加わり、刊年明記は「疱瘡除」の「寛延二年」だけである。

利信の作画期に触れている近年の著述に『初期浮世絵と歌舞伎』（武藤純子著、笠間書院、二〇〇五年刊）がある。一枚絵の作画期は享保三年から寛保二年頃までと上限は延びているが、「絵本に寛延二年の刊行があることから」と「寛保二年」下限説を補強している。

#### 4. 奥村利信画の所見黒本青本

管見に入った奥村利信画の黒本青本は現時点で六点である。『ふくじん』以外の作品五点は次の通りである。各作品に先ず「日本小説年表」および「日本古典籍総合目録データベース」の記述を掲げ、筆者の方式で書誌等を示す。

○編木／三八／疱瘡除 二 奥村利信画 奥村版

・「日本小説年表」p. 269 11（青本、寛延二年の箇所）

・「日本古典籍総合目録データベース」著作ID 1697945  
／統一書名 疱瘡除（ほうそうよく）、K, 1／巻冊 二巻／角書 編木三八／分類 黒本 青本／著者 奥村／利信 画／成立年 寛延二刊／国書所在【版】大東急／著作種別 和古書【大東急】のみ）

所蔵 大東急記念文庫（44 126 4107）

表紙 青本 二冊（合一冊）

題簽 新／板／編木（さゝら）／三八／疱瘡除 上（下）

全揃。白地。下冊の角書文字は「さゝら」。絵の部分下方に各「通塩町（瓢箪形）奥村」と右から左へ。絵は、上冊は酒甕の傍らで舞う猩々と座して唄う猩々（五ウの場面）、下冊は悪鬼を踏み敷き片手で貧乏神を持ち上げる荒若衆三八（九ウの場面）

商標 なし

柱題 ほうそう

丁付 壺式十了

画作者名 鶴月堂／奥村文全利信画（十ウ）

印記 なし

墨記 「寛延二（上冊見返）、「寛延二／編木／三八／疱瘡除 冊上バカリ」（上冊見返に別紙貼付）、「さゝら／三八／疱瘡除 二冊 奥村文全利信画」（挿入別紙）（いずれも蜂屋椎園筆）

内容 正直で情け深い若狭の六郎次は役行者の教えて疱瘡神を祭り、子の疱瘡が軽く済む。始めた酒屋「泉屋」は猩々たちで大繁盛。疱瘡神に追い出された貧乏神の訴えでばらん鬼が六郎次方に押し寄

せるが編木三八と毘沙門天に滅ぼされる。疱瘡神は鮑貝に「編木三八宿」と書いて門に下げよと授ける。八オにある「庄五郎」「ひとへおひ」は松島庄五郎の「一重帯」か、未詳。

紹介『赤本黒本青本集』（大東急記念文庫／善本叢刊 近世篇4、昭和五十一年刊）に影印および解題（中村幸彦）あり。刊年について「本書の見返しに「寛延二巳」と墨書。水谷不倒著『草双紙と読本の研究』に同年とする。何によるか不明。もし寛保三年没の一説によれば、没後の刊、または後印か再版かとなる。寛保三年没説を改めるべきか。」と疑問を呈される。

○高砂十帰松 三 奥村利信画 奥村版

・「日本小説年表」p.259-19（黒本、出版年代未詳部）  
・「日本古典籍総合目録データベース」〔著作ID 360678／統一書名 高砂十帰松（たかさことがりのまつ）, K, 1／巻冊 三巻／分類 黒本／著者 奥村／利信 画／国書所在【版】東洋岩崎／著作種別 和古書（東洋岩崎のみ）

所蔵 岩崎文庫（三Faとイ12-2）

表紙 黒本 三冊（合一冊）

題簽 新／板／高砂十帰松 中

中冊分のみ残存。紅地退色。様式は『編木／三八／疱瘡除』に同。

絵は脇息に依る藤原興風と夢を占う博士（六オの場面）

商標 なし

柱題 高砂

丁付 壺／十五終

画作者名 奥村文全利信画（十五ウ）

印記・墨記 なし

内容 能「高砂」のワキ阿蘇宮の神主友成の夢に住吉神が「高砂松」の謂われを説く構成。歌で松を蘇生させた藤原興風に対し大納言藤原定方の妬みによる悪事が顕れるまで。「富十郎かんざし売り」に窺す件あり。

紹介「未紹介黒本青本」30（木村八重子「日本古書通信」第1002号、2013年1月刊）

○作奴化物退治 三 奥村利信畫

・「日本小説年表」p.282-12（青本、出版年代未詳部）  
・「日本古典籍総合目録データベース」〔著作ID 1402831／統一書名 作奴化物退治（だてやつこばけものたいじ）, K, 1／巻冊 三巻／分類 青本／著者 奥村／利信 画／著作注記 本小説年表による。／著作種別 和古書【版】は記録なし）

所蔵 ホノルル美術館（2010.02.17）

表紙 黒本 合一冊

題簽 新板／作奴化物退治 上

上冊分のみ残存。白地か。様式は『編木／三八／疱瘡除』に同。絵は太鼓の傍らで眠る三之進を下から見上げる奴三平（四ウの場面）

商標 なし

柱題 三平

丁付 一／五、十一／十五（六／十欠）

画作者名 奥村文全利信画（十五ウ）

印記 なし

墨記 「此本何方様江行候共私方江御返し可被下何分通願候□□  
七申□□/□月二十(三十か) 日坂口馬治/□主(□は難読)」(見返)、「明和元年/申七月」(後ろ見返)

内容 小鍛冶宗定公は奴三平に名刀国丸を預け若君の後見とする。三平が、愚かなめのと桃栗三之進と共に、家督を狙う当御台の弟欲五郎とその家来喜惣次を追い散らし、目出度く主家を守るまで。三平が退治する西洋人風化物が印象に残る。中冊未見。

紹介 「ホノルル美術館所蔵黒本青本」(木村八重子編、九州大学ホノルル美術館所蔵和書調査団、二〇一四年刊)

\*なお、平成二十三年十一月、東京古典会に出品され『古典籍展観大入札会目録』(同会刊)、p.244\No.89に図版掲載あり、左の通り。

表紙 青本

題簽 新板/作奴化物退治 下

様式は上冊に同。絵は障子を破って出た大顔の化物の頭と腕を支え足を割って立つ奴(十二ウ十三オの場合)

○狼に衣 二 奥村利信 奥村版

・「日本小説年表」未載

・「日本古典籍総合目録データベース」[著作ID 1116938/統一書名 狼に衣(おおかみにころも), K, 1/巻冊 二巻一冊/分類 黒本 青本/国書所在 【版】東洋岩崎/著作種別 和古書】(東洋岩崎)のみ

所蔵 岩崎文庫(二Faとイ10、12)

表紙 黒本 二冊(合一冊)

題簽 新板/狼に衣 上

上冊分のみ残存。紅地退色か。様式は『編木/三八/疱瘡除』に同。絵は岩の上で鯉口を寛げ両足を開いて立つ荒男と片膝立てた前帯の女房(五オの半九郎とおいね)

商標 なし

柱題 おふかミ

丁付 壺十

画作者名 奥村文全利信(九オ)

印記・墨記 なし

内容 狩人清兵衛が熊に助けられ、発心してむわん和尚となり「狼に衣」の喩えて説法する。豊島屋の田楽や四方の赤という流行語が出てくる。

紹介 『草双紙』(岩崎文庫貴重本叢刊〈近世編〉第六巻、貴重本刊行会、昭和四十九年刊)に影印・要録。「赤本・黒本・青本解題集稿」(六〇)「叢」第26号、東京学芸大学人文社会科学系日本語日本文学研究講座、平成十七年刊、所載)に解題(執筆 山下琢己)

○〔松東枝の衣〕 三 奥村利信 奥村版

・「日本小説年表」未載

・「日本古典籍総合目録データベース」[著作ID 4051416/統一書名 松東枝の衣(まつしのひがしえだのころも), K, 1/巻冊 一冊/著者 奥村/文角(奥村/政信) 画/成立年 寛延二?/国書所在 【版】東北大狩野/著作種別 和古書】(東北大狩野)のみ

所蔵 狩野文庫（4-12128-1）

表紙 青本 合一冊

題簽 欠（表紙に打付書「松東枝の衣」）

『青本絵外題集』I四九九頁に「下」あり。非常な後摺。

新板／三保浦／須磨浦／松東（マ）枝（マ）衣（マ）下

様式は「編木／三八／痾瘡除」に同。絵はあばら屋の内で硯箱を傍らに対座する短冊を持った行平と短冊を床に置いた松風（十ウの場面）。『青本絵外題集』の索引も「松東枝衣」と読んでいるが、「東」と断定するには疑問も残る。

商標 なし

柱題 柰東枝の衣

丁付 壺／十五

画作者名 奥村文角利信（十五ウ）

印記 「荒尾文庫」「幸堂」（見返）

墨記 「寛延三己巳年」（見返）

内容 行平の歌「たちわかれいなばの山のみねにおふるまつとせきかば今かへりこむ」により、天の羽衣に「松東枝衣」（まつとしのころも）と名付け、行平と羽衣伝説を併合した作。

奥村利信の作画期に明確な証拠を示すものではないが、確実な在名本六点を紹介してみた。以上の報告が奥村利信研究に少しでも役に立つなら幸いである。

なお、奥村利信画ではないが、黒本青本作品のなかで「今路考」が用いられている例は、今のところ二点を見出している。宝暦二年

刊とされる『男色鑑 二 鳥居清信画』（三才に「瀬川今路考」とあり）と、明和七年刊とされる『奥州／山洲／潮竈川原院 三 鳥居清信画』（一ウに「瀬川今路考」あり）である。「今路考」が宝暦七年から十年頃までと考えてよいなら、この二点の刊年は再考を要することになる。前者の「宝暦二年刊」はあり得ないことになるが、「明和七年」の方は十三年後にも「今」と言われた可能性も否定しきれない。演劇関係資料の援用は、さらに考察を深めるための有効な手立てと考える。

## 註

- 1 『歌舞伎評判記集成』第二期第六／九卷（岩波書店、一九八九／一九九〇年刊）による。
- 2 『資料／集成／二世市川團十郎』（立教大学近世文学研究会編、和泉書院、昭和六十三年刊）による。
- 3 「新增補浮世絵類考」（『日本随筆大成』第二期11、吉川弘文館、昭和四十九年刊、所載）による。
- 4 『新修日本小説年表』の「年玉日待嚙 三 奥村政房畫」が正しく、『日本小説書目年表』の誤り。